

第1回思修館×超域イノベーション合同討論会

2013年7月14日(日)に、「The Road to All-Round Global Leader—文部科学省博士課程教育リーディングプログラムオールラウンド型 思修館×超域イノベーション第1回合同討論会—」が京都大学近衛館4階にて開催されました。

川井 秀一教授(総合生存学館長・京都大学大学院思修館プログラムコーディネーター, 写真中央)の開会の挨拶の後, 両プログラム履修生によるプログラム紹介が行われ, 思修館からは山脇 大さん(京都大学大学院経済学研究科修士2年・思修館第1期履修生, 写真左), 超域イノベーションからは佐々木 周作さん(大阪大学大学院国際公共政策研究科修士2年・超域イノベーション第1期履修生, 写真右)が代表してプレゼンテーションを行いました。



続いて, 平野実晴さん(京都大学大学院総合生存学館1年・思修館第2期履修生)によるグループワークの趣旨説明後, テーマ「リーディング大学院プログラムを新たに申請するとしたら」が発表され, 90分間という時間制限の下, 各グループでは新たなリーディング大学院プログラム作成に向けた熱いディスカッションが始まり, また統括会議では各グループの発表に対して活発な質疑応答がなされました。その後, 学生と教員は自分達が最も出願したいリーディング大学院プログラムに投票し, その結果グループDが最も多くの得票数を得て, 優勝しました。

最後に, 大寫 幸一郎教授(総合生存学館副館長・思修館第一研修施設長, 写真中央)による講評と閉会の挨拶が行われ, 各グループの僅差の健闘が大いに称えられました。その後の懇親会では, よりざっくばらんな形で各々の研究内容やプログラム内容, そしてリーディング大学院プログラムの抱負や責任などを, 各プログラムの枠を超えて共有できました。



以下、各グループの議論を進めていただいたモデレーターの方々から当日の様子についてまとめていただきました。活発なブレインストーミングが行われたことが窺えます。

Group A 武居弘泰(大阪大学工学研究科修士2年、超域イノベーション第1期履修生)

今回の討論会は、メンバーの理解力と表現力が高く非常に刺激的な議論になりました。ディスカッションは、まずそれぞれの5年後、30年後の理想像を発表し合い、それに向かって大学院で何をすべきかについて議論しました。共通してあったのは、専門性を社会の中で生かすための術を、研究と同時に身につける必要があるという課題意識です。我々のグループは、そのための力を俯瞰力・巻き込み力・実行力の3つとして定義し、5年後に育成されるべき人材を明確にしてカリキュラムを組み立てました。



せっかく多様な意見が出てきても、それぞれをまんべんなく取り入れていては結局は総花的で陳腐なアウトプットになりがちです。尖った意見をいかに引き出し、それをどう取り入れるかはモデレーターの役割であり、今後の課題であると感じています。

一時間半という時間の中で、お互いの自己紹介からはじめ、最終的なアウトプットを発表できる形で出すには、高度なタイムマネジメントが要求されとてもハードでしたが、負荷が大きい分得られたものは大きかったように思います。今後も超域イノベーションと思修館がお互いに切磋琢磨できる関係を構築していければと思っています。

Group B 白石晃将(京都大学大学院農学研究科修士2年、思修館第1期履修生)



私たち、Bグループでは超域イノベーション・思修館両プログラムに共通する内容をベースとして考え、将来のリーダーとしてさらに必要であろう事項に関して新しい内容を考案するといった方法で議論を行いました。「次世代のリーダーを育成する必要性を感じる」「超域には官の方とのつながりが不足している」などの声から【我々の次世代の人材育成】、【産官学それぞれの方とのバランスの良さ】を見据え、達成できるようなプログラムを新たに考案しました。

議論を通して、互いのプログラムを見つめなおすことのできたと同時に、各個人が目指すべき人物像について改めて考えることが出来たと思います。また、お互いのプログラムを知るだけでなく、他プログラム生の意識や考え方に触れ、大きな刺激を受けました。私自身、この第一回討論会にはコアメンバーの一人として携わらせていただくことが出来、グループ編成やテーマの設定など、一つ一つの過程で行われるテレビ会議も新鮮で非常に面白かったです。これからも思修館、さらに超域イノベーションの仲間と切磋琢磨し、よりよいリーディングプログラムを作っていきたいと思っています。

Group C キーリーアレックス竜太(京都大学大学院総合生存学館1年、思修館第2期履修生)

私がモデレーターを務めたCグループでは、主に以下の点に関して盛んな議論が行われた。

それぞれが所属しているプログラム間の違いや困難等に関して

<超域：様々なプロジェクトやイベント等の参加できる貴重な機会は得られるが、専門の研究に充てる時間が足りない>

<思修館：他分野の人同士意見を交換する機会がまだ少ない>

「本当に社会に出て活躍してほしい人材はどのような人物か？」

倫理観や哲学といった、物事の根本にあるものの重要性。」



・それを通じて気付いた点—超域イノベーションプログラムと思修館プログラム、それぞれ特徴は異なれど目指すべき方向、実際にプログラムを終了し社会で果たすべき役割は根本的には同じであると感じた。

・感想—今回のグループワークでは、今後我々が大切にしていけるべき姿勢の一つとして「愛」や「倫理観」について常に考えるべきである、という非常にシンプルかつ価値のある感想をグループメンバー皆が抱いていたように感じた。「如何により良い社会を作るか」「自分を含め周りの人々やこれからの人々のために何が出来るか」これらの我々の重要な課題に関して考える際に、今回の議論で得られた知見は非常に大切なものとなると考える。

Group D 陣内裕成(大阪大学医学系研究科修士2年、超域イノベーション第2期履修生)



思修館も超域も存在感のあるメンバーばかりで、とてもダイナミックなグループワークとなりました。まず、30年後の自分について語り合いから始めました。国際機関やデータ管理者、あるいは牧場経営まで多種多様であり、議論は大いに盛り上がりましたが、最も苦勞したのは、これらの将来を実現するために必要な技能や共通点を抽出することだったと思います。

そこで、私たちは現行のプログラムでは実現できていないことを、思修館と超域生に分かれて意見を出し合いました。その結果、人や資源のネットワークリソースを維持させ拡大させる『ビック・ネットワーク実践論』や、理論と実践のギャップを埋めるための現場体験型講習である『ギャップ・マネジメント実践論』の構想を描くことができたのです。ここまでの過程で重要なことは、誰の専門でもない議論に誰一人受け身でもなく、右に左にダイナミックな議論に誰一人振り落とされなかったことでしょうか。また、「はじめまして」の皆が、まるで4月から同じ場で学んだ同志のように「短時間でダイナミックに協働できた」ということではないでしょうか。一履修生として、今後も面白い合同イベントを継続したいと心から思いました。

今回が初の開催となる、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムオールラウンド型「京都大学大学院思修館」と「超域イノベーションプログラム」の合同討論会は大盛況の中、幕を閉じました。開催にあたってご尽力頂いた超域イノベーションの佐々木さんをはじめとしたプロジェクトメンバーの皆さん、豪雨の中、3連休の中日にも関わらずご参加頂いた先生方、そして両プログラム生の皆さん、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。第2回合同討論会は大阪大学で開催される予定となっています。京都と大阪、共に関西に位置する2つのオールラウンド型プログラムが切磋琢磨できる関係を、これから先も続けていきたいと思えます。

山脇 大(京都大学大学院経済学研究科修士2年, 思修館第1期履修生)